

1. 治水の現状と課題

河川整備計画の策定においては、基本方針である流域一貫の考えにもとづき、河川に関する砂防・ダム・河川・海岸などの諸計画が、流域の視点に立ち、互いに整合性を確保されながら策定する必要がある。

本圏域は、南北に長い流域で、下流側では日高山脈、上流側では十勝岳連峰を後背地に抱え、各地域における、地形・地質および川のなりたちや、過去の被害状況、改修状況等により、河川毎に河床を構成する礫や大雨時の出水状況・被害状況、土砂の移動状況等も異なることから、河川を構成するこれらの要素を総合的に判断し、関連する計画との連携を図りつつ適切な河川の整備計画策定を行うものとする。

[茂発谷川]

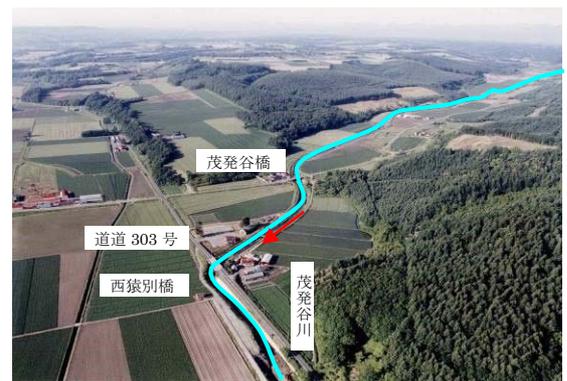
茂発谷川は、幕別町と帯広市との境界を走る主要道しゅうどうどうとよころぬかないめむろせん道豊頃糠内芽室線（62号）の北側約1km地点の明倫地区めいりんに発し、北流しながら、途中新和川しんわがわなどの支川を合わせ、根室本線南側にて猿別川ねむろほんせんに注ぐ流域面積34.8km²、流路延長15.5kmの一級河川である。

茂発谷川の河川名は、アイヌ語のモ・アチャ（小さい・おじさん）に関係するとの説もあるが、詳しい由来は不明である（「北海道の川の名」より）。

茂発谷川流域の地形・地質は、砂岩・シルト岩、礫岩などの第三系～第四系堆積岩からなる丘陵と、その上位に載る河岸段丘（砂礫層・ローム層等）、それらを浅く下刻した谷を埋積する、砂礫・砂～シルトなどの氾濫原堆積物からなる。

流域の土地利用状況は、本川沿いや台地上で耕作されており、主に畑作4品（小麦、馬鈴薯、ビート、豆類）である。また、家畜用採草地としても利用されている。

茂発谷川は、昭和46年から昭和59年にかけて、猿別川との合流点から上流12.5km区間において、国による農業の明渠排水事業が実施されているが、抜本的な治水対策は行われていない。平成10年9月には、豪雨による出水により河川が氾濫し、農地1.9haと家屋1戸が浸水した。また、平成14年10月の台風と平成24年5月の豪雨では、出水により河岸決壊が発生している。平成28年8月の台風7号では溢水し、8.0haに浸水被害が生じ、翌平成29年9月の台風18号では、溢水により床下浸水1戸と6.3haの浸水被害が生じた。このため、流下断面が不足している猿別川合流点より0.4km地点からホープランド橋までの3.4km区間において、一定計画に基づく河川改修を実施し、沿川における治水安全度を確保する必要がある。



▲下流部の農地

表1-2 茂発谷川における主な災害

年次	浸水面積 (ha)			浸水家屋 (棟)			被害原因
	農地	宅地	計	床下	床上	計	
H10. 9. 15-16	1.9	0.0	1.9	1	0	1	豪雨
H14. 10	河岸欠壊						台風
H24. 5	河岸欠壊						豪雨
H28. 8. 16-17	-	-	8.0	0	0	0	台風7号
H29. 9. 18	-	-	6.3	1	0	1	台風18号

出典：帯広建設管理部資料、内閣府資料(H28, H29)



▲茂発谷川第2号橋上流の河岸決壊
 <平成10年9月16日>



▲ホープランド橋下流左岸の氾濫跡
 <平成14年10月>



▲茂発谷川の被災状況
 <平成28年8月>

[糠内川]

糠内川は、更別村弘和付近の丘陵地にその源を發し、北流しながら、途中五位川などの支川を合わせ、幕別町字糠内市街地を貫流して猿別川に注ぐ流域面積48.0km²、流路延長18.8kmの一級河川である。

糠内川の河川名は、アイヌ語のヌカンナイ（小石川の意）に由来するとの説がある（「北海道の川の名」より）。

糠内川流域の地形・地質は、砂岩・シルト岩、礫岩などの第三系堆積岩からなる丘陵と、その上位に載る河岸段丘（砂礫層・ローム層等）、それらを浅く下刻した谷を埋積する、砂礫・砂～シルトなどの氾濫原堆積物からなる。最上流部右岸の第三系には局部的に火砕岩が挟在される。

流域の大部分は農地であり、下流域に糠内市街地が形成されている。

糠内川は、昭和39年から昭和47年にかけて、猿別川との合流点から中里川合流点までの5.8km区間で、また、平成7年から平成13年にかけては、上流部の観音橋から駒島8線橋までの4.1km区間において河川改修が行われた。

しかし、平成14年10月には、台風による出水により床上4戸、床下4戸の浸水被害が発生している。また、近年では、豪雨による出水により橋梁の桁下に迫る増水が幾度となく発生している。このため、流下断面が不足する猿別川合流点から中里橋下流までの5.3km区間において、一定計画に基づく河川改修を実施し、沿川における治水安全度を確保する必要がある。



▲糠内川中流部

表 1-3 糠内川における主な災害

年次	浸水面積 (ha)			浸水家屋 (棟)			被害原因
	農地	宅地	計	床下	床上	計	
S37.8.3	7.0	0.0	7.0	0	0	0	台風第9, 10号
S47.9.6	869.0	0.0	869.0	0	0	0	豪雨、台風20号
S63.11.23-26	3.5	0.1	3.6	10	10	20	波浪・暴風・豪雨
H14.10.1	0.0	1.6	1.6	4	4	8	台風20号

出典：水害統計(S63以前)および帯広建設管理部資料(H14)



▲万代橋付近の増水状況
<平成14年10月>



▲万代橋付近の増水状況
<平成14年10月>

[サッチャルベツ川]

サッチャルベツ川は、その源を更別村と大樹町との町村界の丘陵地に発し、流路を北東にとり、更別村を流下して、猿別川に注ぐ流域面積 33.2km²、流路延長 19.2km の一級河川である。

サッチャルベツ川の河川名は、アイヌ語のサルチャルベツ（葭原よしはらの口の川の意）とサッチャルベツ（乾いた口の川の意）に由来するという説の他に、サツサルベツ（乾いた猿別川の意）に由来するとの説もある（「北海道の川の名」より）。

サッチャルベツ川流域の地形・地質は、広大な河岸段丘面（砂礫層・ローム層等）と、それらの表面を覆う砂～シルトおよび砂礫などの河床堆積物からなる。

流域の大部分は農地であり、中流域に更別村市街地が形成されている。

サッチャルベツ川は、もともと畑地を大きく蛇行しながら流下していたものを、畑地利用の効率化を図るため昭和 33 年から昭和 42 年にかけて農業の排水整備により直線化された。しかしながら、流下能力の不足により度々浸水被害を受け、昭和 56 年 8 月の台風 12 号では浸水面積 292.0ha、床下浸水 1 戸の浸水被害を受けている。そこで、平成 8 年より猿別川合流点からどうどうこうなんさらべつていしやじょうせん道道更南更別停車場線までの延長



▲サッチャルベツ川と更別村市街地

12.4km 区間について河道の掘削などの抜本的な改修

に着手し、平成 24 年までに下流 11.4km 区間について整備が完了しており、今後は残る上流 1.0km 区間において、河道掘削など河川改修を実施していく。また、平成 23 年 9 月には、改修区間よりも上流の村道東 5 号線付近において、台風による出水により道路冠水被害が発生している。このため、流下断面が不足する道道更南更別停車場線から新清橋までの 2.2km 区間についても、一定計画に基づく河川改修を実施し、沿川における治水安全度を確保する必要がある。

表 1-4 サッチャルベツ川における主な災害

年次	浸水面積 (ha)			浸水家屋 (棟)			被害原因
	農地	宅地	計	床下	床上	計	
S56. 8. 3-8. 6	291.9	0.1	292.0	1	0	1	豪雨及び台風 12 号
H10. 9. 15-9. 16	道路冠水						豪雨
H14. 9. 30-10. 2	8.0	0.1	8.1	2	2	4	台風 21 号及び豪雨
H23. 9. 5-9. 6	道路冠水						豪雨

出典：水害統計 (S56・H14) および帯広建設管理部資料 (H10・H23)



▲更新橋上流約 10m 地点
<平成 14 年 10 月>



▲村道東 5 号線の道路冠水状況
<平成 23 年 9 月>

[帯広川]

帯広川は、その源を日高山系に連なる帯広岳（標高 1,089m）に発し、途中イマナイ川などの支川を合わせ、帯広市と芽室町の市町界を流下し、帯広市街地を貫流して札内川に注ぐ、流域面積 185.6 km²、流路延長 46.0km の一級河川である。

帯広川の河川名は、帯広の地名の源であり、アイヌ語のオペリペリケブ（川口が幾筋にも裂けている川の意）に由来するとの説がある（「北海道の川の名」より）。

帯広川の流域の地形・地質は、源流部は先第三系～古第三系中の川層群の砂岩泥岩およびそれらに侵入する深成岩体、ホルンフェルスから、中～下流域は膨大な砂礫とそれを覆うローム・粘土からなる河岸段丘からなる。中下流域では段丘面上に小規模ながら氾濫原が形成されている。

流域は、帯広市と芽室町との境に位置し、上中流域は農地が広がり、下流域は帯広市街地が広がる。

帯広川の治水は、昭和 3 年から昭和 7 年に帯広市街地区間の一部が改修されたが、その後も度々浸水被害を受けたため地域住民より河川改修を要望され、昭和 28 年に抜本的な改修に着手した。改修着手後も、昭和 37 年 8 月の台風 9 号及び 10 号では浸



▲帯広川周辺の市街地

水面積 642.0ha、浸水家屋 1,376 戸などの数々の浸水被害に見舞われた。これを契機に、洪水時には帯広市街地上流で新水路により十勝川へ放流させ、帯広市街地への洪水流量を減少させる治水計画を立案することになり、昭和 45 年に帯広川の中・上流部も含めた改修計画を策定し、工事に着手した。整備中の昭和 50 年 8 月の豪雨では浸水家屋 160 戸、昭和 56 年 8 月の豪雨及び台風では浸水面積 40.6ha と大きな被害を受けたが、平成 6 年に新水路の分流堰が完成し、洪水時は帯広市街地上流からの流水を新水路に流下させている。これまで、大臣管理区間上流端の鎮橋しずめばしから帯広川分流点までの延長 5.7km 区間は昭和 40 年までに整備が完了しており、分流堰から雄馬別川おまべつがわ合流点までの延長 24.6km 区間については、平成 27 年までに整備が完了している。また、帯広川分流堰から境橋までの帯広川周辺には、帯広市街地が広がっており、市街地を流れる河川としては治水安全度が低く、近年の集中豪雨などによる都市型水害事例から周辺住民や帯広市から強く改修を要望されていることから、帯広川分流堰から境橋までの 3.1km 区間において、河川改修を実施し、治水安全度を確保する必要がある。

表 1-5 帯広川における主な災害

年 次	浸水面積 (ha)			浸水家屋 (棟)			被害原因
	農地	宅地	計	床下	床上	計	
S37. 8. 3	391.0	251.0	642.0	640	736	1376	台風 9 号・10 号
S47. 9. 6-9. 19	25.0	62.5	87.5	3	0	3	豪雨及び台風 20 号
S50. 8. 5-8. 25	0.0	1.7	1.7	137	23	160	豪雨及び暴風雨
S56. 8. 3-8. 6	40.6	0.0	40.6	0	0	0	豪雨及び台風 12 号

出典：水害統計



▲西 13 条付近<昭和 50 年 8 月>

出典：水害(北海道開発局、北海道)

[ウツベツ川]

ウツベツ川は、その源を十勝平野中央部の丘陵地（標高130m）に発し、流路を北東にとり、畑作地帯、帯広市街地を貫流した後、帯広川に注ぐ流域面積16.5km²、流路延長14.2kmの一級河川である。

ウツベツ川の河川名は、一説によるとアイヌ語のウツ・ペツ（大きな川や沼に肋骨のような形についている川の意）に由来する（「北海道の川の名」より）。

ウツベツ川の流域の地形・地質は、砂礫およびそれを覆うロームからなる河岸段丘面で構成される。帯広川への合流部では砂礫の上位に薄い腐植土や粘土が堆積し、局所的に氾濫原が形成されている。

流域の大部分は帯広市街地であり、上流域には農地がみられる。



▲ウツベツ川周辺の市街地

ウツベツ川は、昭和28年から平成5年にかけて、帯広川との合流点から市道南15線までの9.4km区間において改修が行われた。近年においては、集中豪雨などによる水位の上昇が頻繁に見られ、平成15年の台風による出水では土木施設被害が発生している。周辺の市街化が進んでおり、市街地を流れる河川としては未だ治水安全度が低く、近年の集中豪雨などによる都市型水害事例から周辺住民や帯広市から強く改修要望があがっているため、流下断面が不足する高倉橋から大空2号橋までの7.6km区間において、河川改修を実施し、治水安全度を確保する必要がある。

表 1-6 ウツベツ川における主な災害

年次	浸水面積 (ha)			浸水家屋 (棟)			被害原因
	農地	宅地	計	床下	床上	計	
S56. 8. 3-6	54.0	0.0	54.0	0	0	0	停滞前線、台風
H15. 8. 6-10	公共土木施設被害(河川)						台風 10 号

出典：水害(北海道開発局、北海道)および水害統計



▲ウツベツ川の洪水氾濫状況

<昭和56年8月>

出典：水害(北海道開発局、北海道)

[柏林台川・第二柏林台川]

柏林台川は、その源を十勝平野中央部の丘陵地（標高90m）に発し、帯広川に注ぐ流域面積10.6km²、流路延長4.0kmの一級河川である。第二柏林台川は、その源を十勝平野中央部の丘陵地（標高90m）に発し、柏林台川に注ぐ流域面積6.7km²、流路延長6.2kmの一級河川である。

柏林台川および第二柏林台川の流域の地形・地質は、十勝川南岸の氾濫原を構成する砂礫とそれを覆う薄い砂～シルト層からなる。

流域の大部分は帯広市街の住宅地であり、上流域は農地となっている。

柏林台川・第二柏林台川は、帯広川との合流点から市道西10号南線までの3.1km区間において、帯広川の改修工事に併せて昭和28年から暫定改修が行われた。近年においては、集中豪雨などによる水位の上昇が頻繁に見られる。周辺の市街化が進んでおり、市街地を流れる河川としては未だ治水安全度が低く、近年の集中豪雨などによる都市型水害事例から周辺住民や帯広市から強く改修要望があがっているため、柏林台川の帯広川合流点から第二柏林台川合流点までの1.6km区間および第二柏林台川の柏林台川合流点から栄森橋までの1.0km区間において、河川改修を実施し、治水安全度を確保する必要がある。



▲柏林台川・第二柏林台川周辺の市街地



▲光西橋上流の河川水位上昇
<平成23年9月>



▲広陽橋上流の河川水位上昇
<平成23年9月>

[伏古別川]

伏古別川は、十勝川に注ぐ流域面積5.1km²、流路延長3.5kmの一級河川である。

伏古別川の河川名は、伏古別村の地名由来である、アイヌ語のフシコヘツ（古川の意）に由来するとの説がある（「角川日本地名大辞典」より）。

伏古別川流域の地形・地質は、十勝川南岸の氾濫原を構成する砂礫とそれを覆う薄い砂～シルト層からなる。

流域の大部分は帯広市街の住宅地である。

伏古別川は、昭和48年から昭和61年にかけて、十勝川との合流点から報和橋上流までの2.8km区間において、下流の約0.5km区間を完成、それより上流は暫定改修が行われた。近年においては、集中豪雨などによる水位の上昇が頻繁に見られ、特に、平成22年8月の豪雨では、計画高水位を超過する水位上昇が発生した。また、平成23年9月の豪雨では、床下浸水1戸の内水被害が発生している。平成28年8月の台風10号では、0.4haと床上浸水1戸の内水被害が発生している。市街地を流れる河川としては未だ治水安全度が低く、近年の集中豪雨などによる都市型水害事例から周辺住民や帯広市から強く改修要望があがっているため、流下断面が不足する十勝川合流点から報和橋上流までの2.8km区間において、内水対策を含めた河川改修を実施し、治水安全度を確保する必要がある。



▲伏古別川周辺の市街地
出典：帯広市資料

表 1-7 伏古別川における主な災害

年次	浸水面積 (ha)			浸水家屋 (棟)			被害原因
	農地	宅地	計	床下	床上	計	
H23. 9. 5-6	0.0	1.0	1.0	1	0	1	豪雨
H28. 8. 30-31	-	-	0.4	0	1	1	台風10号

出典：帯広建設管理部資料、内閣府資料(H28)



▲市街地の道路冠水
＜平成23年9月＞



▲伏古別川内水氾濫状況
<平成28年8月>



▲伏古別川内水氾濫状況
<平成28年8月>

[美生川]

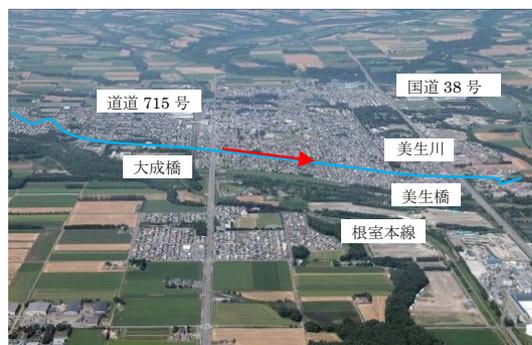
美生川は、その源を芽室岳に発し、急峻な山地を流れ、北流しながらニタナイ川などの支川を合わせ、芽室町市街地の東側を流下し、十勝川に注ぐ流域面積 206.2 km²、流路延長 40.8km の一級河川である。

美生川の河川名は、アイヌ語のピパ・ウシ（沼貝・ある処）に由来するとの説がある（「北海道の川の名」より）。

美生川流域の地形・地質は、川の源流域は片麻状花崗岩が分布し、上中流域はこの地域の基盤岩である先白亜紀系の日高層群である。中流域から下流域にかけて洪積世の扇状地堆積物や段丘堆積物が見られ、川に沿って砂・礫などを主体とした沖積層が分布する

美生川の上中流域は農地が広がり、下流域は芽室町市街地が広がる。

美生川は、昭和39年から54年にかけて、2条7号区間から上流11.0kmにおいて、中小河川改修事業が行われた。しかし、それより上流区間においては、未改修区間となっていた。このため、近年においては、平成28年8月の台風10号では、溢水による浸水が81.0ha、床上浸水1戸、床下浸水1戸の被害が発生し、翌平成29年9月の台風18号では、溢水により27.0haの浸水被害が発生している。さらに、近年の局地的な集中豪雨等による浸水被害の発生が懸念されることから、芽室町から強い改修要望が挙げられている。また、再度災害防止の観点からも、新嵐山橋下流から上美生橋上流までの8.6kmにおいて早急な治水安全度の向上が必要である。



▲美生川周辺の市街地

出典：芽室町資料

表1-8 美生川における主な災害

年次	浸水面積 (ha)			浸水家屋 (棟)			被害原因・被害状況
	農地	宅地	計	床下	床上	計	
S37.8.3	139.0	0.0	174.0	0	1	1	台風9号
S47.9.16-19	3.0	13.0	15.0	0	0	0	台風20号
H28.8.30-31	-	-	81.0	1	1	2	台風10号 麦乾燥施設1棟：床下浸水
H29.9.18	-	-	27.0	0	0	0	台風18号

出典：水害統計、内閣府資料(H28, H29)



▲新嵐山橋上流付近の被災状況
<平成28年8月>



▲上美生橋付近の被災状況
<平成28年8月>

[ピウカ川]

ピウカ川は、その源を芽室町市街地より南西約16kmの丘陵地帯（標高310m）に発し、流路を北東にとり、芽室町市街地を貫流した後、十勝川に合流する流域面積18.1km²、流路延長13.6kmの一級河川である。

ピウカ川流域の地形・地質は、^{しづさんがわ}渋山川、美生川に挟まれた平地もしくは緩やかな段丘地帯をなしている。段丘堆積物は主に、礫や砂で構成され、その上部は火山灰層で覆われている。流域は、下流部の市街地が一部と、中流域の新嵐山地区に山地がある以外は、農地として利用されている。

ピウカ川は、昭和37年及び昭和47年の集中豪雨により、甚大な被害を被った経緯があり、その後、昭和48年から国道橋より上流2.3kmを小規模改修工事により、改修が行われている。昭和56年には大水害があり、215.0haの浸水被害が発生した。そこで、その上流4.2kmが平成元年～11年に小規模改修工事が行われている。それより上流区間においては、昭和62年から平成15年にかけて、国による農業の明渠排水事業が実施されているが、抜本的な治水対策は行われていない。平成28年8月の台風10号では、溢水により浸水19.0ha、床上浸水1戸の被害が生じている。この災害を受けて沿川住民から強い改修要望があがっているため、十勝川合流点からメモロスキー場近傍の支川合流点までのうち、7.5kmの改修を早期に実施し、治水安全度を確保する必要がある。



▲ピウカ川周辺の市街地

出典：芽室町資料

表1-9 ピウカ川における主な災害

年次	浸水面積 (ha)			浸水家屋 (棟)			被害原因
	農地	宅地	計	床下	床上	計	
S47.9.17-19	42.0	53.0	95.0	23	3	26	台風20号
S56.8.3-6	215.0	0	215.0	0	0	0	台風12号
H28.8.30-31	-	-	19.0	0	1	1	台風10号

出典：水害統計、内閣府資料(H28)等



▲美生六号橋付近の被災状況
<平成28年8月>



▲西美生橋付近の被災状況
<平成28年8月>

[芽室川]

芽室川は、その源を日高山系の芽室岳付近の山地に発し、山間部を東方へと流下すると耕作地が広がる丘陵地^{きゅうさんがわ}で久山川や渋山川などの支川と合流した後、芽室町市街西方で十勝川へと注ぐ流域面積229.3km²、流路延長28.1kmの一級河川である。

芽室川の河川名は、アイヌ語のメモロ・ペツ（泉地・の処に・ある・川）に由来するという説がある（「北海道の川の名」より）。

芽室川流域の地形・地質は、源頭域には斑^{はん}瀾^{らん}岩や一部、片麻状花崗岩が分布する。芽室川による開析により、古期扇状地堆積物を堆積させるが、その上位に新たに新規扇状地堆積物が堆積し、現在では上流域から下流域まで広く新期扇状地堆積物が認められるが、古期扇状地堆積物はわずかに下流に認められるに過ぎない。十勝川と合流する辺りでは高位河岸段丘堆積物が両岸に認められる。なお、芽室川に沿って沖積層が分布する。

芽室川の上中流域は農地が広がり、下流域は芽室町市街地が広がる。

芽室川は、昭和40年～48年に国道38号からJR根室本線までの上流1.9kmで災害関連工事、その上流5.0kmで昭和40年～51年に小規模改修工事、その上流2.8kmで昭和44年から49年に局部改良工事、その上流では砂防工事（流路工）と砂防工事（導流堤）が行われている。しかし、近年では、平成28年8月の台風10号で破堤し、芽室町で250.0haの浸水被害が生じ、また清水町では溢水により154.0haの浸水被害が生じた。両町合わせて浸水家屋260戸の被害が生じた。再度災害防止の観点から、国道38号芽室橋からJR根室本線までの1.9kmにおいて河川改修を実施し、治水安全度を確保する必要がある。



▲芽室川周辺の市街地

出典：芽室町資料

表1-10 芽室川における主な災害

年次	浸水面積 (ha)			浸水家屋 (棟)			被害原因・被害状況
	農地	宅地	計	床下	床上	計	
S37. 8. 3	64.0	-	127.0	0	0	0	
S47. 9. 16-19	9.0	11.0	20.0	0	0	0	台風 20 号
S56. 8. 3-6	16.0	0.0	16.0	0	0	0	台風 12 号
H28. 8. 30-31	-	-	404.0	-	-	260	台風 10 号 浸水家屋には家屋損壊を含む

出典：水害統計、内閣府資料(H28)等



▲芽室橋付近の被災状況
<平成 28 年 8 月>



▲鉄道橋付近の被災状況
<平成 28 年 8 月>

[佐幌川]

佐幌川は、その源を日高山脈の北部（標高800m）に発し、同山脈の東斜面を南下して佐幌ダムを経て十勝平野に入り国道38号、JR根室本線と並行に南下を続け新得市街地を貫流し、更に清水町市街地東部を流下し、パンケ新得川、ペケレベツ川、小林川などの支川と合流しながら十勝川に注ぐ流域面積379.6km²、流路延長42.8kmの一級河川である。

佐幌川の河川名は、アイヌ語のサ・オロ・ペツ（前の方（十勝川の方）の・ところに・ある・川）に由来しているという説がある（「北海道の川の名」より）。

佐幌川の地形・地質は、ジュラ紀・白亜紀の粘板岩、シルト岩、花崗岩が基盤をなし、これらを被覆するものは、右岸は扇状地堆積物の砂、礫、左岸には溶結凝灰岩がみられ河川付近では氾濫原堆積物の砂、礫が厚く堆積している。

佐幌川流域の土地利用状況は、山地の源流付近には原生林が残されているが多くはカラマツ等の人工林で整備されており平地は畑、採草地として広く利用されている。沿川には酪農中心の肥沃な耕地が広がっている。

佐幌川は昭和37年8月の台風9号による集中豪雨のため、昭和37～41年に新得町市街地の3.1kmにおいて災害復旧助成事業が、昭和37～40年に清水町の1.4kmにおいて河川等災害関連事業が実施された。昭和49～55年には清水町小林川合流点付近の1.3kmにおいて、局部改良工事が行われた。昭和59年には新得町市街地上流約10km地点に佐幌治水ダム（総貯水容量10,400千m³、流量調節365m³/s）が完成した。その後、昭和61～平成12年に新得町市街地の3.8kmにおいて局部改良工事が行われた。しかし、平成28年8月の台風10号では、54.5haの浸水、浸水家屋104戸の被害が生じた。このため、再度災害防止の観点から、治水安全度を向上させる必要がある。



▲佐幌川周辺の市街地

表1-11 佐幌川における主な災害

年次	浸水面積 (ha)			浸水家屋 (棟)			被災原因・被災状況
	農地	宅地	計	床下	床上	計	
S37.8.3	2421.0	0.0	2423.0	268	35	319	台風9、10号
S47.9.6-19	5.0	5.7	10.7	508	3	511	豪雨及び台風20号
S49.8.2-7	501.8	0.2	502.0	27	0	27	豪雨
S50.8.5-8.25	0.8	0.5	1.3	7	0	7	豪雨、暴風雨
H28.8.30-31	-	-	54.5	-	-	104	台風10号 浸水家屋には家屋損壊を含む

出典：水害統計、内閣府資料(H28)等



▲古潭橋付近の被災状況
<平成 28 年 8 月>



▲神居橋付近の被災状況
<平成 28 年 8 月>

[ペケレベツ川]

ペケレベツ川は、その源を清水町と日高町の町界にある熊見山（標高1175m）に発し、山腹斜面を東に向かって5km程度流下し丘陵地に出て佐幌川に注ぐ流域面積46.6km²、流路延長15.6kmの一級河川である。

ペケレベツ川の河川名は、アイヌ語のペケレ・ペツ（清い・川）に由来し、町名の清水もペケレベツ川に由来しているという説がある（「北海道の川の名」より）。

ペケレベツ川の地形・地質は、源頭域は片麻状花崗岩が分布し、ペケレベツ川によって開析され、まず古期扇状地堆積物を堆積させるが、その上位に新たに新期扇状地堆積物が堆積し、現在では中流域まで新期扇状地堆積物が分布し、下流域に古期扇状地堆積物が認められる。佐幌川と合流する辺りでは高位河岸段丘堆積物が認められる。



▲ペケレベツ川周辺の市街地

ペケレベツ川流域の土地利用状況は、平地部については、佐幌川合流点より1.2kmの地点から上流へ2.0kmの区間が市街地であり、外はすべて農地（畑）である。山地部は針葉樹及び広葉樹である。

ペケレベツ川は、昭和47年～49年に佐幌川合流点から清見橋下流までの1.8kmにおいて災害関連工事、その上流新清橋上流までの1.5kmにおいて昭和51年～61年に小規模改修工事、その上流石山橋上流までの0.5kmを昭和62年から平成元年において局部改良工事、その上流町道ペケレベツ川橋までの1.9kmにおいて平成2年～8年に小規模改修工事、その上流1.8kmは平成6年～砂防工事（流路工）が行われている。しかし、近年では、流下能力を上回る洪水により平成28年の台風10号で浸水家屋434戸、160.0haの浸水被害が発生している。再度災害防止の観点から、佐幌川合流点から清水町道ペケレベツ川橋下流までの4.7kmにおいて河川改修を実施し、治水安全度を確保する必要がある。

表1-12 ペケレベツ川における主な災害

年次	浸水面積 (ha)			浸水家屋 (棟)			被災原因・被災状況
	農地	宅地	計	床下	床上	計	
S37.8.2-4	80.0	-	140.0	40	18	58	台風10号
S47.9.15-19	100.0	-	200.0	80	26	106	台風20号
S56.8.4	3.0	-	16.0	16	3	19	台風12号
H28.8.30-31	-	-	160.0	-	-	434	台風10号 浸水家屋には家屋損壊を含む

出典：水害統計、内閣府資料(H28)等



▲石山橋付近の被災状況

<平成 28 年 8 月>

[パンケ新得川]

パンケ新得川は、その源を狩勝山付近の山地（標高843m）に発し、新得町南部を流下し、途中、第2新得川、第1新得川、九号川などの支川と合流しながら、新得町市街地北部で佐幌川へ合流する流域面積26.9km²、流路延長8.6kmの一級河川である。

パンケ新得川の河川名は、一説によるとパンケ・シットクナイ（川下にあるシットクナイ）で、シットクはシリ・トクで山の突き出ているところをいう（「アイヌ語地名解 北海道地名の起源」による）。

パンケ新得川流域の地形・地質は、源頭域の急峻山地は花崗岩からなり、それ以降、下流域まで砂、礫、粘土を主体とした扇状地堆積物が分布する。

パンケ新得川の上中流域は農地が広がり、下流域は新得町市街地が広がる。

パンケ新得川は、昭和41年～45年に佐幌川合流点から九号川合流点下流までの2.3kmにおいて局部改良工事、その上流3.6kmは昭和41年～47年に砂防工事（流路工）が行われている。しかし近年では、平成28年8月の台風10号で溢水により7.3haの浸水、浸水家屋104戸の被害が生じた。再度災害防止の観点から、佐幌川合流点から上流1.7kmにおいて河川改修を実施し、治水安全度を確保する必要がある。



▲パンケ新得川周辺の市街地

表1-13 パンケ新得川における主な災害

年次	浸水面積 (ha)			浸水家屋 (棟)			被害原因・被害状況
	農地	宅地	計	床下	床上	計	
H28. 8. 30-31	-	-	7.3	-	-	104	台風10号 浸水家屋には家屋 損壊を含む

出典：内閣府資料(H28)等



▲鉄道橋付近の被災状況

<平成28年8月>